

『ハイ・コンセプト——「新しいこと」を考え出す人の時代』

著者/ダニエル・ピンク(三笠書房 1900円税別)

著者のピンク氏は、先進国経済は、論理的・分析的な左脳の能力が主流だった「情報化の時代」から、直感的・統合的な右脳の能力が必要な「コンセプトの時代」に移行し、その新しい時代では右脳の感性を活かして新しいことを考え出す人が活躍するようになる」と指摘する。今回はピンク氏にワークス読者に向けて語っていただいた。

私が右脳経済の出現に気付いたのは、前著書『フリーエージェント社会の到来』の執筆のために会計士や弁護士、コンサルタントなどのフリーエージェント(独立事業家)と会ったときでした。彼らは仕事場をスタジオと呼び、まるで彫刻家のような服装をしていたのです。また組織の中でも特に聡明で優秀な人たちは、MBAではなく美術系の学位を持ち、ビジネスの最先端に右脳の芸術的感性を持ち込んでいることに興味を覚えました。

一方、情報化時代を支えた左脳の職業、例えばプログラマーには、大きな変化が起きていました。変化の一つはアウトソーシング(外注)です。インドでは技術サポートやプログラミンの人工費は米国の10分の1に過ぎないため、多くの仕事がインドに外注されています。もう一つはオートメーション(機械)化です。米国では何百万もの人

が所得税の計算にターボ・タックスというソフトウェアを使うようになったため、左脳のな税理士の仕事は消滅してしまいました。

これからの時代に良い職業に就くには、左脳のな知識や分析力に加えて、それらを生かすための右脳の能力、すなわち文化的教養や大局的な理解力、看護師のような共感する心、人の心の琴線に触れられる力も必要となるのです。

またモノが溢れる現代では、人は単に実用的なトイレブラシではなくデザイナーの手によるものを欲し、ただ性能の良い車ではなく、環境にやさしいハイブリッド車を望みます。その他多くの商品やサービスと一線を画すのに必要なのは、技術ではなくデザインと有意性なのです。

6つのハイ・コンセプト

今、世界は新しいマネジメントを求めています。経営者・マネジャーの方にお伝えしたいのは、これからの時代に私がハイ・コンセプトと呼ぶ6つの右脳の感性——デザイン、物語、調和、共感、遊び心、生きがい——は、経済的な優位性につながると同時に、人々が真に望んでいるものだという事です。

今日の日曜日にここワシントンでは、会計士たちが自宅の裏庭で絵を描くでしょう。理由は

楽しいからです。でも写真家が楽しいからと週末に税金の計算はしないでしょう。給料や忠誠心に頼って好きでもないことをさせるのは、新しい世界の経営スタイルではありません。こう働きたいと望んでいる人々の能力を最大限に生かすのが新しい世界のやり方です。

「コンセプトの時代」への移行に日本はうまく対応しているようです。アニメやマンガ、ハリウッドなど右脳の感性から生み出されたものが、世界に発信されていることに実証されています。日本人がもっと右脳の職業に就くようになれば、ルーチンワークだけの「サラリーマン」時代よりずっと幸せになると思います。

右脳の資質を持つ人を惹きつける組織になれるか

企業にとっては、右脳の感性も持つ人に組織で働いてもらえるよう彼らにとって魅力的で、かつ彼らの能力を最大限に引き出せる組織をつくれるかが課題になります。

人事分野でも外注や機械化は進んでいます。人事に仕事が残されるとすれば、それは芸術的・独創的で職務の大局を捉える仕事にほかなりません。右脳のな新しい職場を作ることは、その仕事のひとつとなるでしょう。(インタビュアー…デビッド・クリールマン)



Photo credit © Nina Subin

プロフィール
ダニエル・ピンク

Pink Daniel

1964年生まれ。エル大学ロースクールで法学博士号取得。米国副大統領の首席スピーチライターなどを務めた後フリーに。ニューヨーク・タイムズ、ワシントン・ポストなどでビジネス、経済、社会についてレポートや論文を執筆。著書に『フリーエージェント社会の到来』。ワシントン D.C.在住。



『日本人はなんのために働いてきたのか』

著者／河原 宏(ユビキタ・スタジオ 2200円税別)

人は何のために働いてきたのだろうか。長い歴史の中で時代を超えて変わらないものはただ一つ、人間の働くということだ。労働が根幹をなして、すべての時代の社会や文化の姿を規定している。本書では、古代、中世、近世、近代、現代の各時代に働くことはどのような意味を持っていたかについて考察している。

戦後日本人にとって働くことの意味とは

私たち日本人は何のために、どのように働いてきたのか。第二次大戦後、見渡す限りの焼け跡と廃墟の中から人々は働き始めた——文字通り死に物狂いで。この壮烈な働き方を始めたのは、苛烈な戦争をくぐり抜けてきた人たちだった。戦場には死んだ戦友を残し、帰国すれば家族は四散して見当たらない人も多かった。彼らは心中にただ無限の悲しみを抱き、我を忘れて働くことだけが救いだった。その結果、戦後の経済成長を達成した。次の世代、つまり戦後派は経済成長の中で成長した。それが彼らの合理主義を育てた。戦後派は前の世代、戦中派の我を忘れて働くような非合理主義を否定した。当時は昨日よりも今日、今日よりも明日がより良くなる、と信じられていた時代。自由・平和・民主・平等・豊かさなど、一言で言えば「進歩の理念」があり、働くこと＝金銭を得ること

と生きるものが進歩につながっていた。

もともと合理主義は非合理を除去する不断の合理化によって実現する。徹底しない合理主義は存在しない。あらゆる愛着や人情も切り捨てる、不合理だからである。現代の徹底した合理主義は0と1を組み合わせたコンピュータに似ている。1は金を唯一神のように崇める金銭至上主義、0は学ばず・働かず・トレーニングもしないという二一トにそれぞれつながる。

しかし今、多くの人々は切に生きがいや働きがいをも求めている。それは多分、楽しく学び、飲んで働く場と機会と形の発見であろう。不可能ではない。本書で述べたように、日本の歴史は時代に応じて様々な実例を示しているからである。(河原談)



河原 宏

かわはら・ひろし

早稲田大学名誉教授。専攻は日本政治思想史。著書に『日本思想の地平と水脈』『昭和政治思想研究』『素朴への回帰——国から「くに」へ』など多数。

『ポローニャの大実験』

著者／星野まりこ(講談社 1700円税別)

ポローニャは、ローマから北西に400キロ離れた人口37万人の都市です。3年前に作家の井上ひさし氏が初対面の私に30年来のポローニャへの想いを熱く語るのを聞き、「ユートピア」と呼ぶほど井上氏を虜にするのはどんな街かと関心を抱いた私は、井上氏をレポーターにテレビ番組の制作に取り掛かりました。期待に胸を膨らませ撮影のため現地に赴いてみると、そこは番組が作れるのかと心配になったほど、ごく普通の街でした。しかし数日後には、私自身もポローニャの街の虜になっていました。私が惹かれたのは街を構成する人、建物、産業、文化といった様々な要素がうまくみ合うことで生み出される心地良さでした。

ポローニャに生きる自立と共生、寛容の精神

古くから周りの地域と交流し、自治を勝ち取ってきた歴史を持つポローニャの人々は、自立と共生、寛容(トランス)の精神をもっています。寛容とは、自分と意見や生き方の異なる人々を受け入れようとする意思のことです。これらの精神は街づくりにも浸透しており、例えば1970年代にポローニャの人々は、空洞化した都市部に生活者が戻れるよう郊外の開発よりも都市部の再生を選択し、一般の人々が生活し働ける建物を

保存し再生してきました。その結果郊外へ流出していた人々や地元産業、職人企業(少人数の専門職人からなる個人企業)が都心に戻り、都心は多様な年代、階層、職種の人々で活気を取り戻し、24時間賑わいのある場に生まれ変わったのです。また中小企業や職人の起業を積極的に支援し、無数の独立企業がお互いの足りないところを補完しあう協関係構築して、世界を席巻するアメリカ型の大企業に対抗しようとしてきました。

これらは「ポローニャ方式」と呼ばれて、創造的街づくりのモデルとして注目されています。本書に綴った、番組制作の過程で出会ったポローニャ方式を体現している人々へインタビューを通して、今の日本へのヒントになればと思っています。(星野談)



星野まりこ

ほしの・まりこ

映像プロデューサー。主なテレビ作品に『日本・言語と人々(BBC共同制作)』『千年の道 祈りの旅スペイン サンティアゴ巡礼路』『井上ひさしのポローニャ日記』、映画『静かな生活』など多数。